

NEW JAPAN
*P*HILHARMONIE
SUMIDA, TOKYO

新日本フィルハーモニー交響楽団
2025/2026シーズン

9

September, 2025



2025/2026 シーズン
新日本フィルハーモニー交響楽団 9月演奏会

Contents

すみだクラシックへの扉 #33 小室敬幸	1
トリフォニーホール・シリーズ／サントリーホール・シリーズ #665 相場ひろ	11
楽員ストーリーズ ⑤⑩ 矢部咲紀子 (ヴァイオリン)	17
NJP from Inside	18
NJP 10月、11月公演 柴田克彦の鑑賞ポイント	23
2025 / 2026シーズン 定期演奏会プログラム	24
お客様からの声	29
室内楽シリーズ	30
「パトロネージュ・システム」のご案内	34

■特別支援企業

オリックス

in 鹿島

CCC

大和証券

東京東信用金庫

NOMURA

フジサンケイグループ

三井住友銀行

■特別支援団体

公益財団法人 オリックス宮内財団

特別支援企業／団体は、新日本フィルの運営を支援しています。

delete  新日本フィルハーモニー交響楽団は、
#deleteC大作戦の啓発パートナーです。

本プログラム冊子は、「deleteC」（みんなの力で、がんを治せる病気にするプロジェクト）に賛同し、表紙の新日本フィルのロゴから「C」を消す表現をしております。
「deleteC」については、P. 33をご覧ください。

〈コンサートの感想をお寄せください〉

QRコードを読み込み、WEBにてお答えください。
<https://www.njp.or.jp/qs>

いただいたお声は次号以降の定期演奏会プログラムなどで紹介させていただく可能性がございます。ご了承ください。



9.12^[金] 13^[土]

すみだクラシックへの扉

新日本フィルハーモニー交響楽団 定期演奏会 すみだクラシックへの扉 第33回

2025年9月12日(金) 14時00分 すみだトリフォニーホール

9月13日(土) 14時00分 すみだトリフォニーホール

● ヴィヴァルディ (1678-1741)

ヴァイオリン協奏曲集「四季」op. 8 *

約45分

Antonio Vivaldi: Violin Concertos "Le Quattro Stagioni (The Four Seasons)", op. 8 *

第1番 木長調「春」RV 269

No. 1 in E major "La primavera", RV 269

I. Allegro II. Largo III. Allegro

第3番 へ長調「秋」RV 293

No. 3 in F major "L'autunno", RV 293

I. Allegro II. Adagio molto III. Allegro

第2番 ト短調「夏」RV 315

No. 2 in G minor "L'estate", RV 315

I. Allegro non molto II. Adagio III. Presto

第4番 へ短調「冬」RV 297

No. 4 in F minor "L'inverno", RV 297

I. Allegro non molto II. Largo III. Allegro

—— 休憩20分 ——

● ロッシーニ (1792-1868)

歌劇『セビリアの理髪師』より 序曲

後半 約45分

Gioachino Rossini: Overture to "Il Barbiere di Siviglia"

● プッチーニ (1858-1924)

歌劇『ラ・ボエーム』より「私が街を歩くと」**

Giacomo Puccini: 'Quando men vo' from "La Bohème" **

● ヴェルディ (1813-1901)

歌劇『椿姫』第1幕への前奏曲

Giuseppe Verdi: Prelude to Act I from "La Traviata"

● ベッリーニ (1801-35)

歌劇『カプレーティ家とモンテッキ家』より「ああ、幾たびか」**

Vincenzo Bellini: 'Oh! Quante volte' from "I Capuleti e i Montecchi" **

● ロッシーニ

歌劇『泥棒かささぎ』序曲

Gioachino Rossini: Overture to "La gazza ladra"

● プッチーニ

歌劇『ジャンニ・スキッキ』より「私のお父さん」**

Giacomo Puccini: 'O mio babbino caro' from "Gianni Schicchi" **

● ロッシーニ

歌劇『ウィリアム・テル』序曲より「スイス軍の行進」

Gioachino Rossini: 'Allegro vivace' from Overture to "Guillaume Tell"

[指揮・ヴァイオリン*] ジャン＝クリストフ・スピノジ

Jean-Christophe Spinosi, Conductor / Violin *

[ヴァイオリン] 崔 文洙 (チェ・ムンス／NJPソロ・コンサートマスター) *

Munsu Choi (Solo Concertmaster, NJP), Violin *

[ソプラノ] 砂川涼子 **

Ryoko Sunakawa, Soprano **

[コンサートマスター] 崔 (チェ) 文洙、伝田正秀

Munsu Choi and Masahide Denda, Concertmaster

■主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団

■共催：すみだトリフォニーホール (公益財団法人墨田区文化振興財団)

■特別協賛：オリックス株式会社／公益財団法人オリックス宮内財団

■助成：文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術等総合支援事業 (公演創造活動))

独立行政法人 日本芸術文化振興会

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

演奏会アンケートは
こちらから
<https://www.njp.or.jp/qs>



オリックス

公益財団法人 オリックス宮内財団





ジャン=クリストフ・スピノジ [指揮・ヴァイオリン]
Jean-Christophe Spinosi, Conductor / Violin

フランス・コルシカ生まれ。ある者に言わせれば、スピノジはクラシック音楽における「アンファン・テリブル」である。彼は並はずれたリズム感と身体能力を持ち合わせた、音楽家＝振付師であり、従来の音楽ジャンルを超え、新たな聴衆へ働きかけ続けているヴァイオリン奏者と指揮者としての両方のキャリアを兼ね備えている。

2007年からは、自ら創設したアンサンブル・マテウスとともにシャトレ劇場で毎シーズン新作オペラを指揮。現在もシャンゼリゼ劇場、アン・デア・ウィーン劇場、ウィーン国立歌劇場で定期的に公演を行っている。

客演指揮者としてもベルリン・ドイツ響、パリ管、ウィーン国立歌劇場管、モンテカルロ・フィル、フランクフルト放送響など、数多くのオーケストラと定期的に共演している。2021年にはベルリン・フィルにも指揮者として登場。バルトリ、ルミュー、ジャルスキーといったアーティストたちとは頻繁に共演しており、彼らとEMIヴァージン・クラシックスのために録音したアルバム『ヒーローズ』は、トリプル・ゴールドを獲得。ドイツ・グラモフォンからリリースされた『ルシファー』と『ミロワール』は、いずれもクラシカ誌の「Choc」賞を受賞している。

近年の活動として、スピノジとアンサンブル・マテウスは、地球温暖化問題に対する意識を高めるためのプログラム、「ミュージック・フォー・ザ・プラネット」プロジェクトをたちあげた。また、2024年のパリ五輪では、職業高校との共同プロジェクトから、シャンゼリゼ劇場でのヴィヴァルディのオペラの新作まで、さまざまな形で「オリンピアード」をテーマとした活動を展開するほか、閉会式にも登場した。



崔 文洙 (NJPソロ・コンサートマスター) [ヴァイオリン]
Munsu Choi (Solo Concertmaster, NJP), Violin

東京生まれ。篠崎功子、久保田良作、江藤俊哉の各氏に師事。桐朋学園大学ディプロマコースを経て1988年ソヴィエト政府奨学金を受けモスクワ音楽院に留学。ワレリー・クリモフ、セルゲイ・ギルシェンコの両氏に師事。94年同音楽院を首席で卒業し、同大学院に進み97年帰国。同年小澤征爾に認められ、新日本フィルのコンサートマスターに就任。2000年より同楽団のソロ・コンサートマスターを務める。09年より大阪フィルの首席客演コンサートマスターに就任。19年より同楽団のソロ・コンサートマスターを務める。現在両楽団のソロ・コンサートマスターとして多忙を極める。指揮者からの信頼も厚く、ソリストとしても小澤征爾、アルミンク、ハーディング、小泉和裕、上岡敏之、井上道義、フライシャー、ボッセらと度々共演。ロシア伝統のヴァイオリン・メソッドの日本における唯一の伝承者であり、ロストロポーヴィチから「素晴らしいヴァイオリニストにして芸術家である」と賞賛された。14年12月には、新日本フィル音楽監督(当時)上岡敏之とのデュオ・リサイタルを開催し、好評を博した。16年、第17回ホテル・オークラ音楽賞 受賞。武蔵野音楽大学客員教授。使用楽器は1661年製ニコラ・アマティ(グランドアマティ)。



©Yoshindou Fukaya

砂川涼子 [ソプラノ] Ryoko Sunakawa, Soprano

可憐な舞台姿と聴くものの心を震わせる歌声で高い人気を誇るソプラノ歌手。日伊声楽コンクール優勝、日本音楽コンクール第1位、五島記念文化賞・オペラ新人賞、リッカルド・ザンドナイ国際声楽コンクールでのザンドナイ賞受賞など、数々の受賞歴を誇る。

武蔵野音楽大学卒業、同大学大学院修了。江副育英会オペラ奨学生、五島記念文化財団奨学生としてイタリアでも研鑽を積む。新国立劇場『オルフェオとエウリディーチェ』タイトルロールで本格的オペラデビュー。その後も数々の公演に出演を続け、その実力に裏打ちされた歌唱は常に高い評価を得ている。また、国内各地のオーケストラからも招かれており、リサイタル、テレビ、ラジオへの出演も数多い。NHKニューイヤーオペラコンサートには、初登場以来出演を重ねている。デビュー・アルバム『ベルカント』に続き、24年に2枚目のCD『悲しくなったときは ～ 日本歌曲のしらべ』をリリース。沖縄県宮古島出身。藤原歌劇団団員。武蔵野音楽大学講師。

15世紀からフィレンツェ共和国（現在はイタリア共和国のフィレンツェ）を統治していたメディチ家は、レオナルド・ダ・ヴィンチ（1452～1519）やミケランジェロ（1475～1564）らといった芸術家のパトロン（パトロネージュ）になったことでも知られている。16世紀後半にはメディチ家の庇護のもと、（ガリレオ・ガリレイの父である）音楽家のヴィンチェンツォ・ガリレイらによってギリシア悲劇の復興が試みられた。古代ギリシアの音楽理論を研究していたジローラモ・メーイの説——後に間違いであったことが判明！——を採用したことで、「単旋律+通奏低音」という形の音楽を生み出し、台詞を歌わせる歌劇（オペラ）という舞台芸術が16世紀末に生まれたのだった。

フィレンツェで生まれたオペラはその後、ナポリなどのイタリア各地や、フランスなどの国外にも広まっていく。18世紀でもドイツ出身のヘンデルが作曲したイタリア・オペラがイギリスで成功したり、ウィーンの宮廷では皇帝ヨーゼフ2世がイタリアの作曲家サリエリを楽長に迎えたりと、引き続きオペラの中心はイタリア語であった。

■ ヴィヴァルディ：ヴァイオリン協奏曲集「四季」op. 8

18世紀前半に活躍したアントニオ・ヴィヴァルディ（1678～1741）も数多くのオペラを作曲しており、ちなみに本日の指揮者ジャン＝クリストフ・スピノジはヴィヴァルディのオペラの録音で高い評価を得ている。

もともとヴィヴァルディはアマチュア奏者だった父からヴァイオリンの手ほどきを受け、父の友人たちから刺激を受けて音楽を学んでいった。教会の司祭となった1703年、25歳の時に作品番号1にあたるトリオ・ソナタ集を出版。以後はヴァイオリン教師をしながら作曲家として活動していく。1711年には協奏曲集を出版、1713年頃からは本格的にオペラも手掛けるようになって1714年11月に最初のオペラを初演している。

1723～24年にかけてヴィヴァルディはローマでオペラを3つ初演したのだが、その最後となったのが「イル・ジュスティーノ」である。このオペラの第1幕 第5場、運命の女神が登場する場面の直前で演奏されるシンフォニア（オペラのなかで歌のない器楽だけの部分につけられる名前）を転用して作曲したのが、実はヴァイオリン協奏曲集「四季」の第1番「春」の第1楽章だった。「四季」を含む12の協奏曲をヴィヴァルディは1724～25年頃に作曲し、「和声と創意の試み」というタイトルで出版し

た。「四季」の楽譜に添えられたソネット（14行詩）で、各楽章で描かれた情景が説明されている。

各曲の特徴 ▶ **第1番 ホ長調「春」 第1楽章** 春の訪れを、小鳥たちの歌、西風と泉のささやき、稲妻と雷鳴を挟み込むことで描いていく。**第2楽章** 花咲く草原で羊飼いが眠り、傍らに犬が寄り添う（ヴィオラが犬の鳴き声を模している）。**第3楽章「羊飼いの踊り」** 歓びに満ちたザンポーニャ（イタリアのバグパイプ）の響きに乗って、ニンフ（妖精）と羊飼いが踊る。

第2番 ト短調「夏」 第1楽章 太陽に焼かれるほどの暑さのなか、独奏ヴァイオリンはカッコウ、次いでキジバトやゴシキヒワの鳴き声を模し、激しい風が吹く。**第2楽章** 稲妻への恐怖ゆえに人々は気持ちが休まらないし、蚊やハエが激しく飛び回る。**第3楽章** 空は稲妻で、麦の穂は雷で切り裂かれる。

第3番 ヘ長調「秋」 第1楽章 農民たちが豊作を祝うが、独奏ヴァイオリンは徐々に酔っ払い、寝てしまう。**第2楽章** 柔らかい風が吹くなか甘い眠りに誘われる。**第3楽章「狩り」** 夜明けの狩りで、犬と銃声で獲物は追い立てられる。

第4番 ヘ短調「冬」 第1楽章 凍てつく雪と北風で、寒さにこごえる。**第2楽章** 凍った道は雨で濡れているが、室内は満ち足りている。**第3楽章** 氷の上を歩いていると転んだり、滑ったりしてしまう。

[楽器編成] ヴァイオリン独奏、チェンバロ、弦楽5部。

* * *

19世紀のイタリア・オペラは、歌手の技巧性と表現力を追求したジョアキーノ・ロッシーニ（1792～1868）とヴィンチェンツォ・ベッリーニ（1801～35）によるベルカント・オペラに始まり、演劇性を高めたジュゼッペ・ヴェルディ（1813～1901）、ワーグナーの影響を取り入れたジャコモ・プッチーニ（1858～1924）と続いていく……。

■ ロッシーニ：歌劇「セビリアの理髪師」より 序曲

今も人気を誇るオペラ ▶ ジョアキーノ・ロッシーニの人気は国内にとどまらず、ベートーヴェン（1770～1827）も嫉妬していたほど。ウィーンやパリでも大成功を収め、フランス在住歴も長かった。ところが1829年にパリ・オペラ座で初演されたグランド・オペラ「ウィリアム・テル」を最後にオペラの作曲をやめてしまい、

オペラ、協奏曲などに
独創性を発揮

ソネット付きの
協奏曲の完成

美食家としての活動が主になっていく。1868年に76歳で亡くなった後は、フォアグラとトリュフを乗せた「ロッシーニ風」という名前がフランス料理に残ったのに対し、作曲家としては急速に過去が存在となっていった。それでも上演され続けたのがボーマルシェの原作に基づく『セビリアの理髪師』だった。

このオペラはロッシーニらしい早書きで、わずか2週間ほどで作曲。1816年2月20日に初演された。ただし序曲は、『セビリアの理髪師』のために書き下ろされたものではなく、3年前にロッシーニが作曲したオペラ『パルミーラのアウレリアーノ』から転用されている。落ち着いたテンポの序奏ではじまり、弦楽器による軽やかだが暗い第1主題、オーボエが吹きはじめる明るい第2主題、少しずつ浮き立っていく小結尾の主題と続く。展開部のないソナタ形式なので、この流れが繰り返され、速度を増す終結部でクライマックスを迎える。

[楽器編成]フルート、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、大太鼓、シンバル、弦楽5部。

■ プッチーニ: 歌劇『ラ・ボエーム』より「私が街を歩くと」

第2幕より ▶
ムゼッタのワルツ

イタリアの作曲家でありながらドイツのワーグナーからも影響を受け、濃厚なオーケストラサウンドで歌を彩り、ライトモチーフを駆使して濃厚なドラマを築いたのがジャコモ・プッチーニだ。彼のオペラのなかで最も人気が高いのが『ラ・ボエーム』(1896年初演)で、まだ飯は食えない若い芸術家や哲学者たちのボヘミアン生活を描いている。カフェを舞台にした第2幕でムゼッタが歌う「私が街を歩くと」は、元恋人である画家マルチェッロを誘惑しようとするアリアだ。「ムゼッタのワルツ」とも呼ばれるように、遅いテンポのワルツになっている。

[編成]ソプラノ独唱、フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、ホルン4、ティンパニ、ハープ、弦楽5部。

■ ヴェルディ: 歌劇『椿姫』第1幕への前奏曲

オペラのドラマを投影 ▶

歌手の技量を前面に押し出しがちなベルカント・オペラに対し、演劇的に強く感情移入させるオペラを生み出したのがジュゼッペ・ヴェルディだ。『リゴレット』と並ぶ中期の代表作が、アレクサンドル・デュマ・フィスの小説に基づく『椿姫』(オペラの原題は『道を踏み外した女』)だ。結核を患

う高級娼婦ヴィオレッタと、彼女に惚れた青年貴族アルフレードを巡る悲劇である。冒頭で演奏される「第1幕への前奏曲」は、第3幕で死期の迫るヴィオレッタを表す音楽ではじまり、第2幕でヴィオレッタが「私を愛してアルフレード」などと歌うメロディへと転じていく。

[楽器編成]フルート、オーボエ、クラリネット、ファゴット2、ホルン4、弦楽5部。

■ ベッリーニ: 歌劇『カプレーティ家とモンテッキ家』より「ああ、幾たびか」

ジュリエッタの ▶
苦しい恋情

ヴィンチェンツォ・ベッリーニは甘美で旋律と、ドラマティックな代表作のひとつ『夢遊病の女』のひとつ前に初演されたのが、シェイクスピアの『ロメオとジュリエット』を原作とする『カプレーティ家とモンテッキ家』だ。カプレーティ家当主の娘ジュリエッタ(ジュリエットのイタリア読み)が初めて登場する場面で歌うのが「ああ、幾たびか」で、親の決めた婚約者との結婚を悲しんで、恋人ロメオへの思いを募らす。

[編成]ソプラノ独唱、フルート、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、ティンパニ、ハープ、弦楽5部。

■ ロッシーニ: 歌劇『泥棒かささぎ』序曲

当時人気を博した ▶
救出オペラ

『セビリアの理髪師』の翌年、『チェネレントラ(シンデレラ)』の次に初演されたのが『泥棒かささぎ』(1817年5月31日初演)である。オペラの分類としては「オペラ・セミセリア」に分類され、悲劇的な内容でありながらも、最後はハッピーエンドを迎える。ベートーヴェンのオペラ『フィデリオ』(1814年初演)と同様に、悪代官によって捕らえられた無実の市民を救出するオペラで、ヒロインのニネッタは銀のスプーンを盗んだ疑いで逮捕されてしまうが実際は鳥のカササギが犯人で、死刑を免れるという物語だ。

序曲の特徴 ▶

序曲は死刑台を想起させる小太鼓のロールが印象的な序奏のあと、3拍子の主部が続く。第3幕の二重唱「それなら私の形見として」にもとづく3拍子の悲しげな第1主題、気まぐれなカササギを思わせる第2主題、悪代官のアリア「そう、可愛い子ちゃん、お前のために」の後半からとられた小結尾の主題が続く。やはり展開部のないソナタ形式なので、同じ流れが繰り返される。

[楽器編成]フルート、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン、ティンパニ、大太鼓、シンバル、小太鼓2、トライアングル、弦楽5部。

■ プッチーニ: 歌劇『ジャンニ・スキッキ』より「私のお父さん」

ヒロインの名アリア ▶ 1896年に『ラ・ボエーム』が初演された後もプッチーニは、『トスカ』(1900)、『蝶々夫人』(1904)と現在でも上演機会の多い傑作を生み出していったが、続く『西部の娘』(1910)と『つばめ』(1917)は定評を得ることが出来なかった。『つばめ』の翌年に初演された『三部作』はその名の通りに3つのオペラを組み合わせた作品で、最後を飾るのが喜劇の『ジャンニ・スキッキ』だ。亡くなった大富豪が遺産を修道院に寄付すると遺言状に書き残していたため、一族は大騒ぎ。遺産の分配がないと結婚の持参金がないリヌッチョ。そんな彼氏を見かねたラウレッタが、切れ者である実父ジャンニ・スキッキに「リヌッチョと結婚できるように協力しないと川に身投げする」と言い寄る場面で歌われるのがアリア「私のお父さん」だ。

【編成】ソプラノ独唱、フルート2、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ハープ、弦楽5部。

■ ロッシーニ: 歌劇『ウィリアム・テル』序曲より「スイス軍の行進」

仏語による
最後のオペラ ▶

前述した通り、1829年に初演されたロッシーニ最後のオペラとなったのがフランス語のオペラ『ウィリアム・テル』である。ドイツの詩人フリードリヒ・フォン・シラーが執筆した戯曲が原作だ。ウィリアム・テル(英語読みで、ドイツ語ではヴィルヘルム・テル、フランス語ではギヨーム・テル)というのは伝説の英雄で、現在のスイス中部を支配していたハプスブルク家の悪代官ゲスラーを暗殺し、スイス独立の契機を生み出したとされる(ただし実在したという証拠は残されていない)。テルは弓矢の名手として知られ、ゲスラーに逮捕された際に命じられて、息子の頭に乘せられたリングを撃ち抜いたエピソードが有名だろう。

序曲の特徴 ▶

1970年代にロッシーニ・ルネッサンス(再評価)が進むまで、オペラ全体を上演する機会は稀だったが、この「スイス軍の行進」だけはコンサートで演奏され続けてきた。序曲は、オペラの内容に対応した4つの部分で構成されており、まるで交響曲のような並びになっているのが面白い。その第4部にあたる「スイス軍の行進」は、ファンファーレの序奏ではじまる三部形式(終結部付き)で、オペラの結末であるスイス側の勝利を予兆する。

【楽器編成】フルート、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、大太鼓、シンバル、トライアングル、弦楽5部。



あしたに必要なものをつくる。人々の心や地球がやせ細るものではない、
希望と呼べるものをつくる。そのために集まる。そして100年先を想い、大事なことに気づき、
知恵を探す。技術を生み出す。きっとよくなる。きっとよくする。
そのころさしを推進力に、つくりながら、つくりながらしあわせを見つける。

「人が生きる」につながるものを、
KAJIMAはつくる。

100年をつくる会社

鹿島

豊島美術館

鹿島特設サイト





SHARE LOUNGE

発想がうまれ、シェアする場所

シェアラウンジは、ラウンジの居心地と本による提案、オフィスの機能性を兼ね備え、訪れた人に「新しい発想を提供する場所」です。

新たな発想は心を躍らせ、生活を明るくし、世界をほんの少し良い場所にしてくれるもの。働く人だけでなく、お子さまや学生、主婦の方など、すべての人たちが日々の暮らしの中で、発想を必要としています。

ここに集まる多様な人々が風景をつくり、そこにいて刺激がもらえたり、本からインスピレーションを得ることもできる。ある時は居心地の良いカフェやバーとして、またある時は体験を促すイベントスペースとして。

新たな発想を生む、たくさんの仕掛けが詰まった空間です。

SHARE LOUNGE by Culture Convenience Club

[SHARE LOUNGE]

代官山 蔦屋書店／丸の内／Olive LOUNGE 渋谷／渋谷サクラステージほか、全国に順次拡大中。最新の店舗一覧はアプリをご覧ください。



SHARE LOUNGE
公式アプリ

App
Store



Google
Play



Triphony Hall Series
Suntory Hall Series
2025-2026 Season
#665

9.20 [土]
トリフォニーホール・シリーズ

新日本フィルハーモニー交響楽団
トリフォニーホール・シリーズ 第665回定期演奏会
2025年9月20日(土) 14時00分
すみだトリフォニーホール

9.21 [日]
サントリーホール・シリーズ

新日本フィルハーモニー交響楽団
サントリーホール・シリーズ 第665回定期演奏会
2025年9月21日(日) 14時00分
サントリーホール

●ベートーヴェン (1770-1827)

ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 op. 61 *

約45分

Ludwig van Beethoven: Violin Concerto in D major, op. 61 *

I. Allegro ma non troppo

II. Larghetto

III. Rondo: Allegro

—— 休憩20分 ——

●ブラームス (1833-97) / シェーンベルク (1874-1951) 編

ピアノ四重奏曲第1番 ト短調 op. 25 (管弦楽版)

約45分

Johannes Brahms: Piano Quartet No. 1 in G minor, op. 25 (arranged for orchestra by Arnold Schönberg)

I. Allegro

II. Intermezzo: Allegro ma non troppo

III. Andante con moto

IV. Rondo alla zingarese: Presto

[指揮] トーマス・ダウスゴー

Thomas Dausgaard, Conductor

[ヴァイオリン] クリスティアン・テツラフ *

Christian Tetzlaff, Violin *

[コンサートマスター] 崔(チェ)文洙、伝田正秀

Munsu Choi and Masahide Denda, Concertmaster

[アシスタント・コンサートマスター] 立上 舞

Mai Tategami, Assistant Concertmaster

■主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団

■共催：すみだトリフォニーホール（公益財団法人墨田区文化振興財団）[9/20公演]

■助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
独立行政法人 日本芸術文化振興会

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

演奏会アンケートは
こちらから
<https://www.njp.or.jp/qs>



Profile



©Thomas Grøndahl

トーマス・ダウスゴー [指揮] Thomas Dausgaard, Conductor

デンマーク生まれ。独創性と革新性に満ちたプログラム、教育への高い関心、賞賛された70作品以上の録音、そして鋭い洞察力が高く評価されている。

1988年シュレスヴィヒ=ホルシュタイン音楽祭にてバーンスタインのマスタークラスを受講。90年には岩城宏之に師事し、その後小澤征爾の指名によってボストン交響楽団のアシスタント・コンダクターをつとめた(93~95年)。

スウェーデン室内管首席指揮者、同団桂冠指揮者、オランダ国立響首席指揮者、同団名誉指揮者、トスカナ管名誉指揮者、BBCスコティッシュ響首席指揮者、シアトル響首席客演指揮者、同団音楽監督などを歴任。デンマーク女王より騎士道十字章を授与され、スウェーデン王立音楽アカデミー会員にも選出されている。

また、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管、バイエルン放送響、ニューヨーク・フィル、ロサンゼルス・フィル、ロンドン響、ミュンヘン・フィルなど世界主要オーケストラを指揮。日本では、都響や新日本フィルと共演。19年には、BBCスコティッシュ響を率い、アジアで初開催となる「BBC Proms JAPAN」に参加。BBC Proms、ザルツブルク音楽祭、タングルウッド音楽祭など、世界の一流音楽祭に定期的に出演している。



©Giorgia Bertazzi

クリスティアン・テツラフ [ヴァイオリン] Christian Tetzlaff, Violin

エキサイティングな活動を続ける現代最高のヴァイオリニストの一人。幅広いレパートリーとともに現代作品の紹介にも積極的である。チェリビダッケ、ハイティンク、ラトル、サロネン、ネルソンスらの名指揮者のもと、ウィーン・フィル、コンセルトヘボウ管、ニューヨーク・フィルなどの超一流楽団と共演を重ね、ベルリン・フィルやカーネギーホール、ウィグモアホールなどではアーティスト・イン・レジデンスを務めた。2022/23年シーズンにはロンドン響の「ポートレート・アーティスト」に選出され、翌シーズンにはラインガウ音楽祭の「フォーカス・アーティスト」なども務める。

室内楽では1994年にテツラフ・カルテットを結成。また妹のターニャやピアニストの故フォークトとのトリオでのシューベルト作品の録音は数々の賞を受賞している。2023年以来、ハイムバッハのシュバマンゲン音楽祭の芸術監督を務めている。

録音は多く、バルトークやベートーヴェン、シベリウスのヴァイオリン協奏曲は多くの賞を受賞。2022年にリリースしたブラームスとベルクの協奏曲も高く評価されている。J.S. バッハの無伴奏ソナタとパルティータは今までに3度録音している。

ドイツのヴァイオリン製作者ペーター・グライナーの楽器を使用。

Program Notes ●相場ひろ [音楽評論]

ヨハネス・ブラームス(1833~97)の器楽曲や室内楽曲を管弦楽に編曲しようという試みは現在に至るまでいくつも行われている。それらの編曲の中で、シェーンベルクによるピアノ四重奏曲第1番ト短調 op.25の編曲はなぜ現在も人気高く、演奏機会が多いのだろうか。

その理由は、まずは編曲した者が他ならぬ20世紀音楽界の偉人であったことが挙げられよう。知名度抜群の作曲家がことさらに先人の作品を編曲したのであれば、話題性も高く、聴き手の好奇心を惹きつけるのに十分だろう。また、シェーンベルク自身が述べているように原曲が「演奏機会に恵まれない」ことも、編曲に有利に働いている。編曲の多くは、聴き馴染みのある曲を素材とすることで、必然的に原曲と比較され、大いに損をすることになる。その点で、室内楽のファン以外にあまり知られることのない作品を選んだのはよい戦略であった。

しかし、この編曲が成功した何よりの理由は、作品の性格にあるように思う。ピアノ四重奏曲第1番は、室内楽でありながら交響曲に比肩するほどのスケール感を持ち、その書法は緻密で間然するところがない。それだけでも管弦楽化に十分耐えうる上に、ブラームスの偏愛したロマ風(ツィンガレーゼ)の音楽が終楽章に置かれていて、その賑々しさや高揚感は大編成の管弦楽で再現されるといちだんと映える。この終楽章については、ブラームスがけって用いなかった大量の打楽器を動員したことでシェーンベルクを批判する向きもあるけれども、その響きの華やかさこそは作品の本質をよく突いていて、むしろ敢えて打楽器で音楽を盛り立てたシェーンベルクの大胆さと本質を見抜く優れたセンスを賞賛するべきではなかろうか。ブラームスの様式から外れることがむしろ作品の性格を鮮やかに表立たせることに貢献した、見事な眼力であり、見事な編曲であった。

■ ベートーヴェン: ヴァイオリン協奏曲 二長調 op.61

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770~1827)のヴァイオリン協奏曲 二長調 op.61は、アン・デア・ウィーン劇場のコンサートマスター兼指揮者として活躍していたフランツ・クレメントのために、1806年11月から12月にかけて、非常に短い期間のうちに一気に書き上げられた。

一般的ヴァイオリン協奏曲と比べてヴァイオリン独奏において高音域が目立って多く使用されているのは、クレメントが楽器の最高音域の演奏に秀でていたためである。とはいえアクロバティックな技巧をひけら

ソロとオーケストラの呼応 ▶

かすような書法は一切見られず、独奏と管弦楽は密接に呼応し合って、壮麗な音楽を繰り広げる。

初演は1806年12月23日にウィーンで行われた。独奏楽器の見せ場に乏しく、かつ長大なために、初演後は演奏機会に恵まれなかったが、ヴァイオリンの歴史に名を残す伝説的な名手ヨーゼフ・ヨアヒムが、1844年に弱冠12歳でこの作品をメンデルスゾーンの指揮下で演奏し、大成功を収めたことで再評価され、多くのヴァイオリン奏者が採り上げるようになった。

曲の構成と
音楽の特徴

第1楽章 アレグロ・マ・ノン・トロppo。ソナタ形式による。ティンパニが二音(レ)を4回叩いて木管による第1主題を呼び出す冒頭は当時としては画期的であった。直後に提示される第1主題と、やはり木管楽器に始まる第2主題は同じ調性により、共に穏やかで抒情的な性格を持つため、通常のソナタ形式のように二つの主題が強い対比を描かず、むしろ協調して楽章の気分を決定づける。

第2楽章 ラルゲット。変奏曲の形式を採り、冒頭管弦楽で提示される詩情豊かな主題が、いくつかのエピソードを挿みつつ3回にわたって変奏される。終結部にはヴァイオリンのカデンツァが入り、休みなく終楽章に移行する。

第3楽章 ロンド。強い躍動感を前面に出した主題に始まる。活気あふれる気分は楽章全体に行き渡り、ヴァイオリン独奏も大いに活躍する。二つのエピソードを挿むロンドは、ヴァイオリンのカデンツァを経て晴れやかに終わる。

[楽器編成] ヴァイオリン独奏、フルート、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部。

■ ブ람ス／シェーンベルク編： ピアノ四重奏曲第1番ト短調 op. 25 (管弦楽版)

原曲作曲の経緯

1850年代半ば、ヨハネス・ブラームスはピアノ協奏曲第1番の作曲に精力を傾ける傍ら、ピアノとヴァイオリン、ヴィオラ、チェロのための四重奏曲の作曲を企てていた。嬰ハ短調というやや特異な調性によるこの四重奏曲は、かなりの程度書き進められていたものの、結局は陽の目を見ることなく、その後20年ほど棚上げにされてしまう。現在第1番として知られるピアノ四重奏曲ト短調 op. 25がいつ頃から書き始められたかは定かではないが、おそらくはこの嬰ハ短調作品と同時期か、そちらが頓挫し

20世紀に見出された
緻密な動機労作

た直後にはいちおうの構想があったことと推察される。作曲はピアノ四重奏曲第2番イ長調 op. 26と並行して進められ、1861年秋にほぼ同時に完成された。初演は同年11月16日、クララ・シューマンをピアノに迎えて行われた。

アルノルト・シェーンベルク(1874~1951)は十二音技法を提唱して20世紀の音楽の発展に大きな寄与を成したけれども、その一方でヨハン・セバスティアン・バッハやブラームスの音楽に対して深い敬意を抱いていた。ブラームスについては、保守的な様式観を前面に出す一方で、作品の根幹を成す基本動機の扱いや主題労作について緻密なプランを立てて実現する才能に惹かれていたようである。シェーンベルクはナチス・ドイツの手を逃れてアメリカ合衆国に移住した後、1937年に、ブラームスのピアノ四重奏曲第1番を管弦楽のために編曲した。その理由をシェーンベルクは友人への私信に「私の好きな作品であるが、なかなか演奏機会に恵まれない曲なので」と書き記している。編曲に際してシェーンベルクは、ブラームスの書法を忠実に守ったと主張しているが、じっさいには20世紀半ばのオーケストラ観が強く反映されている他、個別の楽器についても近代的な機能性を要求したり、ブラームスが用いることのなかった派手派手しい打楽器が多数動員されたりと、独自の編曲姿勢が強く打ち出されたものに仕上がった。

曲の構成と
音楽の特徴

第1楽章 アレグロ。ソナタ形式であり、序奏を経ずに第1主題の提示から始まる。この主題の最初の1小節が全曲を統一する基本動機となる。その扱いの緻密さは、ブラームスの作品中でも屈指と言える。

第2楽章 インテルメッツォ：アレグロ・マ・ノン・トロppo。実質的にスケルツォであるものの、憂愁を含んだ楽想が後年のブラームスを思わせる。最初に登場する主題は、ロベルト・シューマン(1810~56)が妻クララを表すのに用いた「クララの動機」に関連しているとの指摘もある。

第3楽章 アンダンテ・コン・モート。三部形式であり、歌謡的な主部に対して中間部の行進曲的な曲調が強い対比を成す。

第4楽章 ロンド・アラ・ツィンガレーゼ：プレスト。ブラームスの好んだロマ調の賑々しい音楽となっている。前打音の多いロンド主題やピッツィカートの効果的な使用が民俗的な味わいを強調する。

[楽器編成] フルート3(ピッコロ持替)、オーボエ3(イングリッシュホルン持替)、クラリネット2(バスクラリネット持替)、Es管クラリネット、ファゴット3(コントラファゴット持替)、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、グロッケンシュピール、シロフォン、大太鼓、シンバル、小太鼓、トライアングル、タンバリン、弦楽5部。